



訪問診療・往診専門

医療
法人

かさまつ在宅クリニック

かさまつ

通信

No.17

(平成30年2月)

2018年の在宅医療

2018年は戌年。年男ですが気負わず、例年通りできることをコツコツやってまいります。

さて、2018年の在宅医療はどうなっていくのか？気になる話題です。2018年4月、診療報酬・介護報酬の同時改定が行われます。2025年にむけて、超高齢社会における医療・介護の方向性が示されます。国は、医療費削減の観点から“在宅医療”を重視していきたい考えですが、現状まだまだ大きな流れはつくられていません。その流れをつくるために、報酬の改定が行われるのですが、具体的には、「かかりつけ医機能の強化」「質の高い在宅医療・訪問看護の確保」「認知症の者に対する適切な医療の評価」など、診療報酬改定の資料からはこれらのキーワードをみることができます。がんの方だけでなく、がん以外の方（難病、心疾患、脳疾患、肺疾患、認知症など）も含めたすべての患者さんが、住み慣れた地域で、安心して暮らせるシステムづくり（地域包括ケアシステム）のさらなる推進と、最期まで在宅で暮らすことができるシステムづくり（在宅看取りを含む）の構築が重要な課題です。

当クリニックでは、子供から大人まで、家で過ごすことを希望している患者さんのサポートに入らせていただいておりますが、引き続きこの役割を担い、さらに質を高め、同じスピリッツを持った医療職や介護職の仲間を増やしていければと思います。

「ともに考える」をテーマに、患者さんやそのご家族と一緒に考え、ときには一緒に笑い、大切な時間を共有できればと思います。本年もよろしくお願い申し上げます。



●●●●●●●●●●●●●●●● ●●●●●●●●●●●●●●●●

当クリニックでは、「物忘れ相談プログラム MSP-1100」（左写真）を購入いたしました。タッチパネルで質問に答えていき、認知機能を評価するものです。約10分程度でできる簡単な質問です。ご興味がある方は、当クリニックまでご連絡ください。診察時に機器を持参し、ご自宅でやっていただきます。もちろん費用はかかりません（無料）。他の自治体からは、この機器を利用し、認知症の早期発見につながったとの報告があがってきています。お気軽にお問合せいただければと思います。

（院長 笠松 哲司）



第6回 徳島市在宅医療市民公開講座

「父、立川談志と家族の258日」～自分らしく最期を迎えるには～

日時：平成30年2月18日

場所：徳島グランヴィリオホテル

※入場は無料ですが、整理券が必要です。

定員 先着300名

お問合せ：徳島市在宅医療センター（088-625-3960）

講師：松岡 ゆみこ

（タレント）

落語家・立川談志の長女





訪問診療・往診専門

医療
法人

かさまつ在宅クリニック

かさまつ

通信

No. 17

(平成30年2月)

みなさん、こんにちは。平成30年に入って、第1回目のかさまつ通信です。
今年もどうぞよろしくお付き合いくださいませ。

さて、話は一昨年前まで遡りますが、日本小児科医会の中四国ブロックで小児在宅医療の実態調査をするという話が持ち上がり、ちょうど1年前、私が徳島県の調査を担当させていただきました。調査内容は、徳島県内の主な病院の小児科外来で管理されている医療的ケア児・者数を洗い出すというものでしたが、これはなかなか難しい調査でして、難航を極めました。というのも、小児科の患者さんと言っても40歳以上になっておられる方もいらっしゃいますし、一人の患者さんが重複して多数の科で管理されている場合もあります。調査が難しいということで、今までに行政がこのような調査を行った形跡もありませんでした。それを、一開業医が公的病院の患者数まで調べるといえる試みではあったのですが、本当にたくさんの先生方にご協力いただき、徳島県としての調査結果をまとめ、無事に報告することができました。

先日、中四国9件の調査結果をまとめたものが送られてきましたが、四国4県の中では徳島県が最も少ない患者数でした（正確な数ではないとの想定ですが。）しかし、人口1万人あたりの在宅で管理されている医療的ケアを必要とする患者数は、徳島県は1.5/万人であり、愛媛1.4/万人、香川1.4/万人、高知1.8/万人と比べて大差ないことがわかりました。またこれは、全国での推定1.34/万人よりむしろ高い数字が出たこととなります。また18歳以上の患者さんが、各県で21~40%を占めており、成人期への移行が大きな課題として浮かび上がってきました。

昨年の徳島県の出生数は5,400人を切り、約1万人の方が亡くなったことで人口は全体で約5,800人の減です。恐ろしいほどのスピードで少子高齢化が進む中、小さな小児の患者さんを診たことがない看護職の方も増えていると思います。が、より高度な医療的ケアを必要とする乳幼児さんは確実に増え、成人期に移行する患者さんはもっと増えます。「小児だから診られない」では、安心して地域で暮らしていくことはできないと危機感を覚えています。また、小児科から成人期医療への移行・転換も真剣に検討すべき時期なのではないでしょうか。

私の患者さんも、長い方では5年以上のお付き合いになりました。お子さんの5年間という時間は、とても大きく意味のある時間です。小児期から思春期を迎え、大人へと。私もそばで寄り添いながら、成長を見守っていきたいと思います。



我が家の睡蓮鉢に張った氷。
今年是最強寒波到来で、
氷が解けません。
メダカは元気かな？

(小児科 笠松 由華)

